

令和元年5月28日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17389

研究課題名(和文)現代における状況的学習論の意義の再検討

研究課題名(英文)Reconsideration on the significance of situated learning theory in modern times

研究代表者

平田 仁胤(Yoshitsugu, Hirata)

岡山大学・教育学研究科・講師

研究者番号：50582227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は状況的学習論の再検討を目的としている。いわゆるヴィゴツキー学派の一人であるエンゲストロームの活動理論およびウィットゲンシュタインの言語哲学の知見を手がかりとして、状況の境界を越境することがいかにして可能かを論究した。その結果、言語への原初的信頼を基盤として、教師による権威的働きかけによって越境が可能になることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、状況的学習論の思想的背景を精査し、分析哲学の側面からその意義と課題を析出することを試みた。その結果、言語への原初的信頼を足場として、教師の権威に基づく働きかけが状況の越境を促すことを明らかにした。従来、再組織化という鍵概念によって指摘されるにとどまっていた状況の越境の理路を、言語と権威という視座から解明することに貢献したと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reexamine situated learning theories. The study discussed thoroughly how some boundaries of situation could be crossed in terms of Engestrom activity theory and Wittgenstein linguistic philosophy. The result of the study is that teachers' ex cathedra work on children could cause the boundary crossing based on sharing the proto-faith in language.

研究分野：教育学(教育哲学)

キーワード：状況的学習論 ウィットゲンシュタイン 再組織化 越境

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

当初、学習論の領域において注目されてきた状況的学習論の意義と課題を検討し、現代においても通用する状況的学習論を論究することを目的としていた。状況的学習論が、学習がつねにすでに状況に埋め込まれていることを解明した反面、従来想定されてきた学習の転移と呼ばれる状況を越境するかのような現象について、状況論的視点からの十分な解明はなされてはこなかった。

学習が状況に埋め込まれているのであれば、転移と呼ばれる現象は生起しないはずだが、それは卑近な事例において生起しているようにも思われる。つまり、転移とは異なったメカニズムによって転移に見える現象が起きていると考えられるが、その点についての理論的解明が課題として残されているのである。

代表者は、これまでウィトゲンシュタイン哲学を視座として教育の記述を試みてきた。彼の規則をめぐる考察群は、規則に従えるようになること、言い換えれば、規則を学習することが共同体の存立と不即不離の関係にあることを示唆している。しかし同時に、規則とは、状況を超えても適用されるものの謂いであるため、共同体内部に留めおかれる規則という概念は、それ自体矛盾している。ウィトゲンシュタインはその矛盾を抱え込んだ規則概念を探究しており、彼の哲学から状況的学習論を照らし出せば、何らかの新しい知見がもたらされると考え、本研究に着手した。

### 2. 研究の目的

したがって、本研究は上述の問題に答えるべく、次のような仮説を立てた。すなわち、実践共同体概念を単一のものとして捉えるのではなく、つねにすでに共同体が重層的でありながら離反もしているという仮説である。そして、諸状況の学習の越境可能性について研究を進めることにした。どのようにして状況は越境されるのか。あるいは越境されていると思われる現象に、どのような断絶があるのか。状況論そのものの再検討を行いながら、ウィトゲンシュタイン哲学を用いることによって、それらの解明を目指した。

### 3. 研究の方法

研究目的を達成するために、具体的には各年度において、以下のことを論究しようとした。研究手法は文献研究に寄っている。

#### (1) 状況的学習論の批判的検討

まずは、ギブソンのアフォーダンス理論や社会学のエスノメソドロロジーやヴィゴツキー学派の活動理論、そして認知科学など状況的学習論の源流となった先行研究の分析から開始する計画を立てた。

#### (2) 状況的学習論に対する分析哲学的検討

次に、分析哲学的な視点から、状況論的学習論の検討を行った。たとえば、イスラエル・シェフラーは「学習」の概念が転移を含意すると指摘する。ウィトゲンシュタイン哲学およびウィトゲンシュタイン的アプローチを採用する教育哲学の議論から、転移のプロセスについて原理的な考察を行うことによって、状況論への内在的アプローチでは見いだせない限界と可能性を、外在的に析出することを目指した。

#### (3) 学習の転移および実践共同体論の考察

最後に、上述の知見をもとに、学習の転移と呼ばれる現象を解明し、それを踏まえた状況的学習論における実践共同体のあり方を理論的に提示することを試みた。

### 4. 研究成果

以下、各年度における研究成果の概要をまとめ、最後にそれらを踏まえての総合的知見について述べる。

#### (1) 初年度：状況的学習論の批判的検討

いわゆるヴィゴツキー学派の一人であり、現在も精力的な研究活動を行っているユーリア・エンゲストロームの活動理論の検討に着手した。ヴィゴツキーおよびレオンチェフの理論を引きながら、エンゲストロームは自らの理論を構築している。すなわち、主体・道具・対象（および結果）というヴィゴツキーの理論をさらに拡張し、規則・共同体・分業という契機も含めて、人間の活動をモデル化したのである。

エンゲストロームの活動理論は、学習の包括的説明を行う理論的視座を提供しているのみならず、異なる活動領域間における創発のメカニズムをも解明している。彼によれば、状況を越えて創発が起きるのは、異なる活動システム間における対象（結果）が共有されており、かつ、その産出をめぐってお互いの活動システムへとフィードバックが起きる場合である。

学習の転移と呼ばれる現象は、エンゲストロームの活動理論によれば、活動システムへのフィードバックを通じて活動システムそれ自体が再組織化され、その結果として、活動システムが拡張されることとして説明される。

しかしながらエンゲストロームは、システムが拡張されるメカニズムについて説明を与えてはいるものの、その過程において働いている基盤については十分に論じてはいなかった。つまり、なぜ活動システムが異なるにもかかわらず、対象（結果）を共有し、相互作用をし、シス

テムそれ自体を変容へと開くことができるのか、という点を論じていなかったのである。初年度の研究では、活動システムの再組織化を基盤から支えるものとして、言語に対する原初的信頼の感覚があることを、エンゲストロームのテキスト分析を通じて明らかにし、論文化することに成功した。

ただし、当初の研究目的であった、状況的学習論の源流にある諸研究を扱うことはできず、エンゲストロームの活動理論の検討のみにとどまった。

### (2)次年度：状況的学習論に対する分析哲学的検討

次年度は、上述の再組織化の過程において、言語およびそれへの原初的信頼がどのような役割を果たすのかを論究するために、ウィトゲンシュタイン哲学を視座として分析を試みた。

メレディス・ウィリアムズのウィトゲンシュタイン解釈によれば、人間が規則を学習するために欠かせないのは、訓練を受けることである。それは、熟練者（大人あるいは教師）から、未熟者（子どもあるいは生徒）へとなされるものであり、そこには権力の非対称性が備わっている。自然数の規則を学ぶさい、その順序について未熟者から熟練者への異議申し立てはありえず、しかも、熟練者から未熟者への訂正や評価が一方向的にくだされる。そこには、たとえ合理的説明や説得のモーメントがあるにしても、熟練者の教育に未熟者は従うしかない。

その訓練の成果として、未熟者は次第に規則を把握するようになり、最終的には熟練者による訓練がなくとも自律的に規則に従うことができるようになる。これがウィリアムズのウィトゲンシュタイン解釈の要諦である。

ウィリアムズの解釈において重要なことは、熟練者によってなされる訓練をなぜ未熟者は受け入れなければならないのかを説明している点である。彼女によれば、それは熟練者が共同体の代表者であるという権威（authority）にこそ、それを可能にする力があるという。もし未熟者からの異議申し立てが可能であれば、規則を教える訓練は成立しないからだ。熟練者の権威と、未熟者の盲目的な服従（blind obedience）の態度とが、訓練に必要不可欠であるとされている。

本研究課題に鑑みれば、ウィリアムズの議論は次のような意義を持っている。ウィトゲンシュタインの挙げる訓練の事例は、自然数や言語などをその対象としている。いずれも、ひとたび訓練を受けたならば、それへの信念を獲得し、自律的に用いることができるようになる。それは、同時に初年度明らかにした言語への信頼を獲得することでもある。つまり、教師の権威によって、言語的基盤が用意され、それは状況を越境するさいの駆動力となるのである。

また、ソール・クリプキのウィトゲンシュタイン解釈とそれへの諸批判の検討を通じて、実践共同体概念の捉え直しおよび再組織化の過程の明確にした。クリプキへの批判として中心的なのは、規則遵守を成立させる共同体という概念装置への疑義である。共同体のいわば共同性は何に由来するのか。どのように観測・定義されるのか。クリプキはそれへの明確な答えを用意していなかったため、その点に批判が浴びせられてきた。

だが、共同体を静的にではなく動的に捉えるならば、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈とそれへの諸批判を整合的に考えることができる。つまり、共同体の共同性は常に揺らいであり、日々の実践によって生成・変容し続けていると考えるのである。いわば創造的再生産の過程それ自体にしか立ち会うことができないために、共同体概念への批判が展開されたのだ。

この点を本研究課題の視座から検討するならば、状況的学習論における実践共同体もまたつねに、創造的再生産し続けており、その過程において生成・変容を行っていると考えられる。学習の転移は、状況的学習論においては、規則応用図式的な静的メカニズムではなく、創造的再生産という動的メカニズムにおいて捉えることができるのである。

### (3)最終年度：学習の転移および実践共同体論の考察

最終年度は、ウィトゲンシュタインの『確実性の問題』を検討し、状況の再組織化過程について、より詳細な理路を見出すことを目指した。

『確実性の問題』は晩期ウィトゲンシュタインの著作であり、倫理学者ムーアの議論に触発されながら進めていった考察群をウィトゲンシュタインの弟子がまとめたものである。ウィトゲンシュタインは、私たちの営みを足場から支えている知が存在しており、それは疑いの対象とならないと述べる。たとえば「物理的对象は存在する」「私は帰納の法則が真であることを知っている」といった命題は、自然科学という営みにおいては疑われない命題である。それらの命題を疑っているのは科学という営みがたちをなさないからである。この命題によって指示される疑われない世界の見方を、ウィトゲンシュタインは世界像と呼ぶ。

『確実性の問題』は、教育についてもいくつかの断片を残しており、それらによれば教育とは、指示的であれ非指示的であれ、子どもに世界像を確信させる営みであるという。その教育過程は、タブラ・ラサな子どもに世界像を描き込むというよりも、すでに獲得してしまっているある種の素朴な世界像を疑わせ、新しいそれへと誘うものである。

そのさい、決定的な役割を果たすのが教師の権威である。具体的には、学校という言語ゲームには、教師は信頼に値する人物であるという暗黙のルールがある。それを足場にして、教師が子どもの素朴な世界像を動揺させるような働きかけを行い、子どもを不安定な状態へと陥れる。そして新しい世界を提示し、それへと馴染ませるのである。

訓練をめぐるウィリアムズの議論が指摘していたように、ある世界像から別の世界像への移

行（もちろん「半身」の状態も含めて）にも、教師の権威が決定的な役割を果たしている。やもすれば学習者と教育者を同一地平に配置したり、教育にまつわる権威性を否定したりする向きがあるなか、教師の権威によって新しい世界像が開けるといふ指摘は、エンゲストロームの活動理論を学校現場ベースで展開するためにも必要なものであると考えられる。

#### (4)総合的知見

本研究は、状況的学習論の思想的背景を精査し、分析哲学の側面からその意義と課題を析出することを試みた。その結果、言語への原初的信頼を足場として、教師の権威に基づく働きかけが状況の越境を促すことを明らかにした。従来、再組織化という鍵概念によって指摘されるにとどまっていた状況の越境の理路を、言語と権威という視座から解明することに貢献したと考えられる。

ただし、残された課題も多い。言語および権威という概念は、様々な学問領域において膨大な先行研究があり、それらとの比較検討をしつつ、さらに越境概念を解明しなければならない。

状況的学習論の批判的検討は、エンゲストロームの活動理論の検討にとどまったため、より多くの理論を検討することが求められる。

また、別の課題として、現代における実践共同体のあり方についての具体的な提言が残されている。福島が指摘するように、近代資本主義社会における共同体のあり方は、徒弟制をモデルとして論じ切れるものではない。たしかに、レイヴとウェンガーが想定していた状況的学習論における実践共同体は 福島の指摘とは異なり 現代を念頭ににおいた多面的・多層的なありかたをしている。しかし、それが具体的にどのようなものなのかについて、提言するにはいたらなかった。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計1件)

平田仁胤、2017、「エンゲストロームの拡張的学習における言語的基盤」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第164巻、19-29頁、査読無  
[http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/54834/20170302170214744826/bgeou\\_164\\_019\\_029.pdf](http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/54834/20170302170214744826/bgeou_164_019_029.pdf)

### 〔学会発表〕(計4件)

司会者：丸山恭司、報告者：杉田浩崇・平田仁胤・山岸賢一郎・渡邊福太郎「教育学としてのウィトゲンシュタイン研究 現在の到達点と今後の課題」教育思想史学会第28回大会シンポジウム、2018年9月9日、大阪大学吹田キャンパス（大阪府・吹田市）

Yasushi Maruyama, Yoshitsugu Hirata, Takahiro Sugita, Sinichiro Yamagishi and Fukutaro Watanabe, "How Wittgenstein's Philosophy has impact on educational research in Japan", British Wittgenstein Society Conference, 10th Annual Conference, 2018年7月31日, University College London(United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)

平田仁胤、「状況的学習論における状況とは何か ウィトゲンシュタイン規則遵守論を手掛かりに」教育哲学会第60回大会、2017年10月15日、大阪大学吹田キャンパス（大阪府・吹田市）

平田仁胤、「ウィトゲンシュタインの規則順守論における共同体説は、どのようにして共同体の境界線を引くのか」応用哲学会第9回年次研究大会、2017年4月22日、福山平成大学（広島県・福山市）

### 〔図書〕(計1件)

鈴木篤・平田仁胤・杉田浩崇、2019、「第12章 教育的関係の存立条件に対するルーマン・ウィトゲンシュタイン的アプローチ 教師と子どもたちの関係はどのようにして生まれるのか」坂越正樹監修、丸山恭司・山名淳編著『教育的関係の解釈学』東信堂、170-190頁。

### 〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

なし

### (2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。